

国士舘大学武道德育研究所設立二十周年記念

# 国際武道シンポジウム

## ならびに祝賀会報告

平成十年七月十六日（土）

主催 国士舘大学武道德育研究所

後援 駐日オランダ国大使館

全日本学生柔道連盟

東京学生柔道連盟

世田谷区教育委員会

# プログラム

## 第一部 国際武道シンポジウム

13:00  
～  
15:00

国士舘大学世田谷中央図書館多目的ホール

## 第二部 実技指導

15:30  
～  
17:00

国士舘大学武道体育棟二階柔道場

## 第三部 記念祝賀会

18:30  
～  
21:00

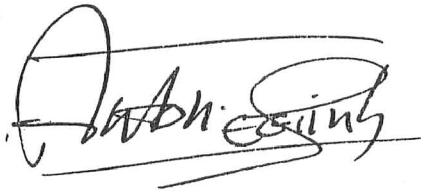
赤坂「キャピタル東急ホテル」

**"If you want to be a champion,  
you have to look like a champion"**

(王者たらんと欲する者は、王者らしくあれ)

## **JUDO IN EVOLUTION**

Each period and each culture has its own kind of practice in sport. There is no doubt this holds for the forms of fighting that preceded judo in Japan. In its short history judo has spread quickly to areas outside Japan. This internationalization of judo has resulted in a new era of technical development. Whenever changes occur, however, there are people who would like to see things remain unchanged. The propagation of new insights therefore needs thorough explanation to create sufficient understanding and consensus how judo should evolve. I am therefore very honoured to tell the Japanese people about my ideas to develop judo in order to keep it an attractive sport for everybody in the 21<sup>st</sup> century.

A handwritten signature in black ink, appearing to read 'Geesink', with a large, stylized initial 'G' and a long horizontal stroke extending to the right.

## **Mr. Geesink のセミナーに対するメッセージです。 柔道の発展**

スポーツには、各時代、各文化ごとに独自の練習法がある。柔道が誕生する以前の日本の格闘技にも、それが見られる。柔道は、短期間のうちに飛躍的な速度で国外にまで広まった。この柔道の国際化が、技の発展の新たな時代の始まりだった。しかし、変化が生じる際、必ずその一方で現状維持を望む人々がいる。新たな考えの普及には、柔道がどのように発展していくべきかについて十分な理解と意見の一致を得なければならない。それには、徹底した話し合いや説明が必要である。柔道が、21世紀の人々にも魅力的なスポーツであり続け、一層発展していくうえでの私の考えを日本の皆様にもこの度お話しすることができ大変光栄に思っています。

# 国士舘大学表敬訪問



今野氏 フランケン教授 ステンゲンカ教授 フルーツ教授  
 中島教授 野木教授 柏谷副学長  
 A. フロックランド(大使館員) A. ヘーシク 三浦学長







シンポジウム(パネラーの先生方)



## 第一部 国際武道シンポジウム

13:00  
～  
15:00

国士舘大学世田谷中央図書館多目的ホール

『いまこそ武道―二十一世紀における武道教育の役割』

総合司会：野木 将典（国士舘大学教授・武道徳育研究所所長）

パネラー：A・J・ヘーシンク（オリンピック委員、世界柔道連盟十段、  
東京オリンピック金メダリスト）

デービット・松本（SFS大学教授）

芳賀 脩光（筑波大学教授）

風間 健（武道教育研究家）

中島 貅（国士舘大学武道徳育研究所教授）

司会 ただいまより国士舘大学武道徳育研究所設立二十周年記念国際武道シンポジウムを開催いたします。本日の  
司会の北川でございます。

それでは最初に武道徳育研究所所長野木将典教授が皆様方に御挨拶申し上げます。

野木 本日は大変お忙しい中をご出席していただきまして、誠にありがとうございます。皆様の前にあの有名なア  
ントン・ヘーシング先生がお座りを頂いております。我々は日頃武道の魂をどう受け継ぐかということを研鑽してお  
ります当研究所といたしましては、この夢が今実現したということで感無量でございます。本日を迎えるに当たって、  
西原理事長先生、三浦学長先生を初め、関係の皆様には大変なご協力とお世話をいただきましたこと誠にありがとうございます。

ございました。

今日、我が国の社会状況は混迷を極めております。特に眼を子供達に向ければ、いじめ、登校拒否、校内暴力……といった憂慮すべき教育問題が山積しております。しかし、その解決方法を見出すことはなかなか困難であります。

我々が目的として掲げております「文武両道の精神」を再認識することこそ、その問題解決の糸口を提示できるものと信じます。当研究所の存在意義もまさにその点にあると思われまふ。本日は理事長、学長両先生からもご挨拶をいただくことになっております。よろしく最後までお聞きいただければ幸いです。

司会　引き続きまして、国士館大学学長三浦信行先生からご挨拶をいただきます。

三浦　国士館大学の学長の三浦でございます。きょうは大変お忙しい夏の暑い中、お集まりいただき心より感謝申し上げます。

今、野木武徳研究所長からご案内がありましたように、武徳研究所は開設二十周年ということで、又、本学にとりましても、昨年、八十周年を迎えることができました。この記念するよき日に国士館大学武道徳育研究所が国際武道シンポジウムを行う事に際しまして、遠くはオランダから、一九六四年東京オリンピック無差別級で優勝されたヘーシング先生をお招きし、このシンポジウムを開催することを、私ども国士館大学といたしましても大変光栄に存じておる次第でございます。創立以来、国士館大学は、文武両道の精神をもって頑張ってきております。

きょうお集まりの皆様、それから諸先生方、八十周年の記念事業として、この会場を今年四月から使い始めました。大きな会議といたしましては何回か行いましたが、このような国際シンポジウムを開催することは初めてでございます。きょうは、そのような非常に記念になるシンポジウムであろうかと思ひます。また、海外からも多くの先生方が

このシンポジウムに駆けつけていただき、関係される方々が協力して、この立派なシンポジウムができましたことを衷心より御礼申し上げます、感謝の言葉と、また、きょうのシンポジウムが無事に終わりますことを祈念いたしまして、挨拶にかえさせていただきます。

司会 それでは、学校法人国士館理事長西原春夫先生からご挨拶をいただきます。

西原 ヘーシングさん、野木所長、ご列席の皆様、一九六四年の東京オリンピックでヘーシングさんが日本の神永選手を打ち負かして優勝したのを見たとき、私は日本人として大変残念に思い、日本柔道の弱さに腹を立てました。しかし、少したつてよく考えてみると、柔道は日本が発祥のものだが、これで世界の柔道になったのだということに気がづきました。柔道を世界に普及させるために、非常にたくさんの日本人、外国人の柔道家が大変な努力をされたと思います、それら多くの方々の努力の成果の象徴がヘーシングさんであったということに気づいたわけです。

全然別な話ですが、日本の経済成長が頂点に達した一九七〇年ごろから、戦後、日本の学校教育に密でいた欠陥がだんだんと明らかになってまいりました。最初は中学・高校生の校内暴力から始まりましたが、やがてこの暴力が生徒や生徒の仲間に向けられるようになって、最近では中学生がナイフで先生を刺し殺すというような衝撃的な姿をもってあらわれるようになりました。これらの現象は、もはや学校教師、生徒の欠陥ばかりではなくて、戦後五十年にわたる日本社会のあり方全体がその背景にあると言わざるを得ません。

少年非行の背景にある日本社会全体のあり方の中で最も問題であるのは、戦後の日本が戦前の反省から基本的人権のみを尊重して、本来、法や秩序と並行して強い力を発揮していなければならなかった倫理体系を軽視したところにあると思います。その結果、多くの子供が甘やかされて育ち、そのために自分の欲望を抑制できない子供がふえてし

まいりました。そこに現在の青少年問題の根本的な原因があると思います。子供に自己抑制力をつける、これこそが現在の教育の最大課題にはかならないのでありますが、その方法を見つけるのは大変困難であります。政府の審議会の答申を見ても、有効な方法は提案されておりません。

そういう中であって私が考えたのは、学校教育、社会教育の中に柔道や剣道など、礼に始まり、礼に終わる武道を普及させるということです。我が国士館は武道を建学の精神の一つの大きな柱とする学園であり、現に中学、高校では柔剣道が必修となっております。これは一見すると古めかしく、後ろ向きのように見えますが、今になってみると、実は時代の先端を行く教育方針であることに人々は必ず気がつくはずであると考えております。そういう意味で、ことし設立二十周年を迎えたこの国士館大学武道徳育研究所はまさに新たな出発を迎えたことになるわけであり、これを機会に一層の活躍を遂げられることをお祈りいたします。

また、「いまこそ武道」というテーマを掲げたこの国際シンポジウムは、そのような意味ではまさに時宜に適したものであります。お忙しい中、はるばる遠いオランダからご参加くださったヘーシングさんを初め、オランダの方々、また、アメリカからご参加して頂きましたDr松本、さらに開催のために努力された関係者の皆様に対し、改めて心から感謝申し上げます。本日のシンポジウムの成果を心から祈念いたしまして、私のあいさつといたします。

司会 それでは早速、シンポジウムの「いまこそ武道——21世紀における武道教育の役割——」に入らせていただきます。

野木 それでは、これから先生方のお話を聞きながら、皆様に柔道、武道というものを十分ご理解していただきましたと思っています。先ほど理事長からすばらしいメッセージをいただきました、学長からも、この会におけるお話を

いただき、元総理大臣の海部俊樹および元文部大臣の森先生から、これからの教育においては武道というものの、文武両道の精神がいかに大切かということのメッセージをいただきました。我々はその期待にこたえ、このシンポジウムを進めていきたいと思っております。

それでは、パネラーの先生を紹介をさせていただきます。最初に、本日のスペシャルゲストであります、国際IOC委員、元世界柔道連盟教育普及委員、世界柔道連盟から初の十段を称号されました、皆様ご承知の東京オリンピック無差別級金メダリストのアントン・ヘーシング先生でございます。ヘーシング先生は二十一年前、カラー柔道着についての提唱を堂々とされ、本日、お弟子さんや周りの方々のカラー柔道着が目につくところであります。

続きましてサンフランシスコ州立大学教授であり、異文化環境研究所長、全米柔道連盟専務理事のデービット・松本先生でございます。わざわざこのシンポジウムのために、昨日、アメリカからおいでいただきまして本当にありがとうございます。

続きまして筑波大学教授であり、教育学博士の芳賀脩光先生です。

つづいて武道教育研究家で、国際俳優である風間健先生です。

そして、きょうはオランダから三人の先生が見えておりますのでご紹介いたします。フランケン、フルトス、ステンゲンガ各先生です。

そして、当研究所の教授の中島先生です。

きょうは、この会場に元世界チャンピオンの柏崎克彦先生（国際武道大学）、および本学卒業生の西田孝宏先生（山梨学院大学）そして全日本チャンピオンの金野潤先生（日本大学卒）がこの会場に見えになっておられますので

ご紹介させて頂きます。この三人の先生がそろうということはとても珍しいことでございます。この国際シンポジウムを盛り上げていただき本当に感謝申し上げます。

それでは、これからヘーシング先生のすばらしい講義がございましたが、その前に、タイトルであります「いまこそ武道」ということに関してのお話をパネラーの先生方からいただきたいと思います。風間先生、まず、トップバッターでお願い致します。

風間 ご紹介いただきました、武道教育研究家の風間です。きょうは大変意義あるシンポジウムに参加させていいただきましたことは野木先生初め理事長、学長および諸先生方に感謝申し上げます次第です。

私が今、こういう壇に立たせていただいたことは大変感謝しておりますが、残念ながら、今日の日本の教育のあり方というものに対して大変悩んでおります。私が十数年前、今上天皇の前でジャパンスピリットの代表として演武やらせていただきましたときに、自分はまだ能力がないのでお断りしますと断りましたが、これから頑張るということであればいいんじゃないかと受け取り、参加をさせていただきました。そのときは真剣白刃どりをさせていただきましたけれども、これは覚悟ということをもって、私は挑戦をしました。その後、十数年たって、いまだにまだ自分の力がなくて、皆さんの理解が得られなかったことに対して大変残念でありました。

日本という民族性の精神——スピリットが余りにもなくなっている現状であります。これは青少年の問題がどうのこうのという前に、私たち教育者たちが真剣に考えて、覚悟した行動をとらなければいけないときだと思っております。子供たちが悪いのではなくて、ただ子供たちは教育を受けてきたわけです。戦争に行かれた七十代以上の方々が国のために戦いました。戦うということはどういう意味かということは、国を守るがために戦ったと思います。その

意義は、敗戦という空しさの結果で終わりそして、反省することも多々ありました。

その後、食うこと、住むところ、それから自分たちの生活というものに対して、泥だらけで一生懸命頑張られたと思います。その後の次代を担う私たちが教育というものに対して責任を持たずに、戦後の復興の中で一生懸命立ち上がられた方々の跡を継がず、また、その人たちができなかったことを私たちがやらなければいけなかったのに、それをしなかったことは事実だと思います。それは五十代、四十代の我々の責任だと私は思っております。その多くの人たちが教育に携わっております。その教育が真剣でなかった、覚悟がなかったと思っております。今の若者たちはそれに気がついていて、いい加減なことを言いながら、自分たちはやることもやらんで……。素直な心で大人たちを見た姿が、今の若者たちの反抗の姿だと私は思っております。その中に、これではいかんと気がついていて若者たちも多々いると思います。その人たちが真剣に民族という責任と、閉鎖された、鎖国化された日本ではなくて、人類という中で国際化された社会の中で十分に活躍する時代がもう来ております。日本民族として、スピリット、かつ人類を大事にする人間性を持って生きなければいけないのではないのか。きちっとした民族性、精神というものを、人を愛するということ、人類を愛するという中で真剣に取り組んでいる今の若者たちの役に立ちたい、そういう気持ちで接していきたいと思っています。

その中で、痛いことを逃げ、嫌なことを避け、すべてのものに対して挑戦をする方ではなくて、どちらかというと逃げることに躍起になる人たちが余りにも今の若者たちに多いということが残念でなりません。今のあなたたち若者に私は言いたいのですが、それは、そのきっかけを与えなかった私たちの責任です。今日、こうして私に会えた人たちの中にもいるかも知りません。その人たちに何らかの意見があったら、私はそれに答えたいと思う。そして、君



たちの役に立ちたいと思っています。それに反省する大人達が、今、この会場に参加されていると思います。その力を結集して、今、これだけの人たちが精神を一つにして一体となって、武道という礼儀、礼節をもって真なるスピリットを身につけて、責任を持って人類を愛していけば、私は二十一世紀は変わると確信しております。

そういう意味で、この武道徳育研究所のなす責任は大変大きいと思います。人間には良い面、悪い面がたくさんありますけれども、その悪い面を表に出すのではなくて、悪い面を直しながら、良い面を生かしながら、共に生きられることを、私はこの場をかりてお願いしたいと思っております。これから武道徳育研究所を通して人間関係の教育がますます盛んになり、責任のある日本民族としての誇りと、人類に対する愛情を持てる日本人として成長していただけることをお願いしたいと思います。

私もまだまだ勉強中です。指導者に学びの心なくして指導はない訳です。教えているという生意気な考え方をする人たちも多いと思います。また、偽りの状態で物を見ている人たちも多いと思います。責任というものをきちっと持つて行動していく時代に入ったと思います。正直、人間が全てをつくっております。経済も、全てのものを人間がやるわけです。機械に動かされる人間にならないように、これからみんなで勉強し、私も勉強させていただきたいと思います。せっかくこういう出会いの縁をいただき、わざわざオランダからヘーシング先生を初め多くの方々に来ていただきます、本当にありがとうございます。この会がとても盛況に、一つの布石になって、国士舘大学、また、武道徳育研究所をきっかけに、大きな力となる花火を上げたいと私は思っております。きょうは本当にありがとうございます。

野木 続きまして、芳賀脩光先生のご講演を願いたいと思います。

芳賀 ご紹介いただきました筑波大学の芳賀と申します。きょうは理事長先生、それから学長先生、武徳研究所の野木所長、関係者の皆さんにお招きにあずかりまして、またご指名をいただきましたことを大変厚くお礼申し上げます。また、きょうは滅多にお会いすることができないアントン・ヘーシング先生とご一緒にお仕事ができるということとを大変誇りに思います。きょうは私に与えられた時間は非常に短いですが、日ごろ柔道を通して武道というものにかかり合っている一人として、若干の考えを申し上げたいと思います。

まず、武道というのとは何か、こういうことがずっと昔から論議されてきています。もう一つ、それに非常に似た考え、あるいは言葉があります。それは「武士道」という言葉です。いろいろな書物を読んでもみると、江戸時代、あるいは明治の初期、そういう時代にあつては、武士道と武道はほぼ同じ考えになっていたのではないかと思っております。しかし、第二次大戦以後の新しい日本においては、武道というものと武士道というものは少し解釈が異なっているという理解しております。

現在行われている武道はどういうふうに定義されているかというと、日本古来の武芸十八般の中には、柔道、剣道の名前も入っております。弓道も、棒術も、空手も、相撲もすべて入っております。そういうものの総合された名称であるというとならえ方を今日ではしております。だから、必ずしも武士道という昔の侍の精神を引きずっているものではないと考えられる部分があります。ところが、私は武道という言葉の中には、やはり一つの日本独特の精神は持っているという解釈しております。

その中で武士道の時代においても、現代においても最も大切なものは何かと申しますと、私は武道というものを今から話すように考えているわけですが、一つは、武道というものは勇気を要するもの。その勇気というのはどういう

ことかというところ、それはどんな困難なことがあっても、最後まで仕事をやり通すという勇氣であります。

しかるに、もう一つ武道の非常に大事なことは忍耐という言葉です。勇氣を持って一つの仕事をなし遂げるということは、おのずから、それは忍耐ということであります。したがって、『勇氣』という言葉と『忍耐』という言葉はいわゆる表裏一体の関係にある。どんな人でも、どんな物事でも頑張っていかなければならないものがあります。その忍耐という言葉を養うものが武道であると理解しています。

もう一つは、先ほどお話にもございましたように仁愛——人を愛するというところで、これは人をいたわり合うということですから、人を助ける、人に優しさを向ける、こういうことが武道のもう一つの要素であります。

もう一つ大事なことは、これは礼儀であります。この礼儀というのは何かというと、これはいろいろな人の礼儀作法、あるいは、いろいろな考え方も含めて礼儀と言うときがある。礼儀というのは道徳の基本であると思います。その形が柔道の場合、礼をきちっとする。終わったときも礼をする。一つの形としてあらわれているものが、我々が言う柔道の場面であります。礼儀が非常に大事でなければならぬ、このように私は思っているわけです。この武道というものを中心として、あってもいい、そうなるべきだと私は考えているわけです。

そこで柔道の話を少し織りまぜてみたいと思いますが、嘉納治五郎先生は、一つの最終的な理念、考え方として、皆さんもご承知のように『精力善用』という言葉を言っております。その『精力善用』という言葉は何かというと、自分の能力を最善に活用するということから、能力においても、わざの上でも、決して自分の力を無駄に使わないということであろうと私は理解しています。ですから、少ない力で大きな人を投げることができるという解釈がそこに出てくるわけです。そのように考えますと、この武道とのかかわりを見ますと、まことに勇氣を持って、耐え忍

んで一つの仕事をなし遂げることにおいて、嘉納治五郎先生の精神がそこに一緒になってくると理解しているわけです。

それからもう一つ、嘉納治五郎先生の考え方は、いわゆる他人に対して、自分が精一杯やることによって、他の人を労わる。そして、人を助けることは自分のためでもあり、自分も一生懸命やるのが他人を助けることであるという事で、「自他共栄」という言葉を使われています。これはお互いに人を愛するという言葉の必要性、愛情を持って労わり合うということの必要性を説いているわけです。恵みがあれば、自分たちだけではなくて、他の人にも分け与えるということだろうと考えます。

今日、世界を見ると、二十一世紀を目前としているとはいえ、やはり世界のあちこちで戦争が行なわれております。それから、一方、日本の中で見ると、青少年の乱れた生活態度もいっぱいあります。したがって、この武道を修業すると、これはいかに自分を鍛え、そして人のために役に立つという生き方を身に付くか、教育の上で非常に重要なものではないかと思っております。

今日、日本においては、一つは、先ほど理事長先生もお話になりましたように、経済の不況があり、あるいは子供たちの不良行為があり、そしてもう一つ、日本において大事なことは何かといえば、高齢化社会が来るということです。この分野において、日本は非常に大きな課題を抱えているわけですが、武道というものを通して、我々が何かの分野でその役に立なければいけないと思います。

そして日常生活の中で最も重要なものは、私は礼儀だと理解しています。この礼儀というのは、通常の道徳というものの基本である。そして、この礼儀作法をしっかりできる者が、しっかりした精神を持って自分の肉体をコントロール

ルできる人間である、そのように理解しています。

私の話がただけ皆さんのお役に立てたかわかりませんが、剣道、あるいは柔道、相撲、空手、いろいろな武道がありますけれども、そういうものを通して自分を自己探検していつて、そして世の中のためになる人になる。自分で意識して、それをやるべきだと思っております。細かい意見がありましたらディスカッションで申し上げます。以上です。

野木 ありがとうございます。

続きまして、デービット・松本先生、お話をお願いいたします。

松本 ご紹介いただきました、サンフランシスコ州立大学の松本です。国士館大学、そして武道徳育研究所にお招きいただきましてありがとうございます。二十一世紀に向けて、武道の役割を心理学的な面からちょっと考えたいと思います。

実は今日の世界の中では大変な変化が起きていると思います。毎日、変わりつつあると思います。たとえば以前には通信機関としては手紙がありましたけれども、手紙が遅過ぎるからエクスプレスメール、エクスプレスメールが遅過ぎるからファックス、ファックスが遅いので電子メールに変わりました。そういうふうにテクノロジーによっての変化が毎日／＼変化しております。私たちはその変化の中で生活しているわけです。その変化をしている私たちの世の中というのは、毎日、ルールが変わって行きます。カルチャー——文化も変わります。そういう毎日変わりつつある中で、時々大切な事を忘れやすくなることがあります。何が大切なのか、何が重要なのか、それを忘れることが多くなっています。

今日の社会、特にスポーツ社会を見えますと、私に言わせれば変な待遇があります。それは何かというと、金と勝ち負けの精神です。そこで、これから二十一世紀に向けて何が大事なのか、武道を通じて考え直すことができる一番いいのではないかと思います。

先ほどバネラーの先生がおっしゃっていますけれども、武道の目的というのはいい人間をつくることです。いい人間を完成することです。そして社会に貢献することです。私は武道すべてはわかりませんが、柔道はちょっとだけわかります。柔道というのは素晴らしい技術、素晴らしいスポーツ、そして人生の歩み方を教えてくれる道だと私は思います。柔道を学びながら、尊敬、礼儀作法、忍耐、勇気、マナー、エチケット、努力、ルールワーク、忠義、謙虚さ、こういうような素晴らしいいろいろな価値観を学びます。もしもこのような素晴らしい価値観を社会に貢献することができたら、これからの二十一世紀に向けて、私たちは人間らしく生きていけると思います。人間らしく生きていくことが非常に大事だと思います。

人間と動物の違いはいろいろありますけれども、私に言わせれば大事なことが三つあります。一つは、スピーチとコミュニケーションができることです。もう一つは、カルチャー——文化を持つことです。もう一つは、すばらしい価値観を持つことです。そういう三つのことで、私たちは動物と異なります。しかし、せっかくチャンスがあるのに、いい価値観を持っていないければ、私たちはそれをすべてむだにして、動物と余り違わなくなるのではないのでしょうか。そこで武道を通じて、私たち人間が人間らしく生きていけるようになれば非常にすばらしいと思います。

しかし、私の考えでは、現代の柔道ではそれは不可能だと思います。現代の柔道の指導、あるいは組織、すべて余りにも勝ち負け、そしてお金の回し方に注目され過ぎていると私は思います。それを変えるには、私たちは根本的に

柔道のシステムを考え直し、変えるべきところを変えなければいけない。そういうことをしなければ、私たちは武道を通じてもどうにもならないと思います。ですから、組織、指導法、先生の選び方、先生の教育の方法、そして生徒の教育の受け入れ方、最初から最後まですべて根本的に考え直さなければならぬと私は思います。

もちろん皆さんがご存じのように、オリンピックという素晴らしいスポーツの大会があります。きょうここにお集まりになられた方の中にも、オリンピックに出場して活躍なさった方が何人かいらっしゃると思います。そういうスポーツもオリンピックも必要だと思いますけれど、もう一つのオリンピックも必要なのではないかと私は思います。それは何かというと、人徳と徳育のオリンピックだと思います。そういうオリンピックの大会では、素晴らしい人徳、優秀な性格を持っている人たちしか出場できません。そこで金メダリストになった人たちは、まさに素晴らしい性格を持った、我々の社会のモデルの人だと私は思います。

私は日系三世で、私のルーツは日本です。もちろん試合に出た日本人が勝つと私はうれしいです。私はアメリカの強化委員長として務めておりますので、アメリカ人が勝つてもうれしいです。しかし、これからは勝ち負けだけでなく、どのぐらいメダルを取ったかだけではなくて、メダルの数を一切考えないで何が必要なのかということ、こういう道にどうやって行くかということを考えなければいけないと思います。日系人、あるいは外国人の皆さんが日本を見ています。日本は見詰められています。どうするかを見ています。

我々は何を望んでいるかというと、試合のメダルの数だけでなく、日本に、こういう道を歩むようにリードしてくれるように望んでいます。リードしてほしいのです。これからメインイベントになりますけれども、きょう皆さんが聞いて、おもしろかった、終わったら、それでさようなら、そういうことで終わってしまえば何の役にも立たな

と思います。チャレンジはこれからです。国士館大学武道徳育研究所だけではなくて、日本の武道のリーダー達にも、こういうチャレンジは目の前にあります。この問題にどの様に答えますでしょうか。これで終わらせていただきます。

野木 力強いお話で、ありがとうございました。時間が限られておりますので、このことについての皆さんのご意見をまた後ほど質疑応答で聞きたいと思っています。

それでは当研究所の助教である中島先生、お願いいたします。

中島 ただいまご紹介にあずかりました国士館大学武道徳育研究所の中島です。私は生涯教育というテーマと、現在、子供たちとの柔道教育をライフワークとして実践しており、特に子供たちを通じて、私は専門が柔道でありますので、柔道を通して、先程来から先生方がおっしゃっておられます忍耐力だとか、人を愛する気持ちだとか、労わりの心、そしてまた国際性という、そういったものをテーマに、日夜、自分も励み、子供たちと接する場合には、まず、自分も同じ高さになることに常に心がけております。先日、四十五センチの世界と云うテレビ番組を拝見しましたが、身障者の方がカメラを通じて自分の高さから物を見するというテレビを拝見致しました。私たちも指導者として、子供たちと同じレベル、同じ高さに立って子供達に接し、ともにプレーを楽しむということだと思っています。

特に私は子供たちの幼児教育の中で大切な要素が三つあると常に考えております。それは、まず第一に協調性だと思います。仲間同士の協調性——いたわりもそこに入ると思います。お互いに助け、助けられる。先ほど芳賀先生が申されました自他共栄の精神が、そこに含まれているのではないかと思います。友達をつくるということ、柔道を通じてコミュニケーションをつくるということです。



第二にバランス性です。バランスというのは小さい時に養わなければ、大きくなってからでは遅いと思います。自分で自分をコントロールできるような能力というのは、将来、どのスポーツに移っても必要不可欠な要素だと思います。ですから、バランス性は、幼児のとても大切な……。例えばお子さんはお母さんのおなかの中で既に泳いでいるわけですから、泳ぐということに対しては生まれた時点で可能なのです。実際、私自身、自分の子供を生後、三ヶ月目にプールの中にほうり込んだという経験もございます。決して子供はおぼれません。浮いてきます。ばたばたとバタ足します。これは既に平衡感覚というものを自然に持って生れてきているのではないかと思います。

次に冒険心、チャレンジ精神です。これは一つの技を習得したら、次の技を習得する。例えば子供たちは六級、五級、四級、三級と級が上がって行きます。このようにして、一つの級が上がることに自分との挑戦というか、自分に対する挑戦をそこで養っているのではないかと。そうすると、もし柔道でなくてもほかのスポーツにおいても、それが非常に役に立つ。新しいテクニックにチャレンジしていく。以上三つの要素が、私は幼児にとって非常に大切な要素ではないかと考えます。

それから、もう一つ大切なことは心の持ち方です。例えば私の教えているお子さんの中に反抗期に入る子供がいました。ご両親もどう対応していいかわからないことがあります。私と両親との間で、ゆっくり二人三脚でいきましょう、慌てずに子供を見守りましょうというって、子供と両親と三者一体になって話し込んでいけば、立派にそれを脱出できます。その後そのお子さんは、私のクラブでリーダーシップをとれるぐらいの力がついてきました。だから、強いとか弱いというのはその後の問題です。

ただ、柔道には嘉納先生が言われた勝負法というのがあります。勝ち負けというのもその一つであります。そし

て、その後にくるのは人間形成ではないかと思えます。みずからゴミを拾う気持ち、みずから人を労わる気持ち、みずから電車の中で年配の方に席を譲る、そういった労わりの精神が、自然と自分の能力、教養として身についてくるのではないかと思います。

私のテーマは、生涯学習、生涯スポーツとして柔道を取り入れて、そして今、幼児教育に全力で頑張っております。そして、その子供たちがいずれは社会人になり、日本のリーダーとなり、世界のリーダーとなっていくわけですから、まさに二十一世紀においては不可欠な要素、また、スポーツではないかと考えます。

私が海外で生活していた時に、ある生徒が高校しか出ていなかったけれども、柔道を通じて人を知り勉強をしたいと、それから夜間大学を卒業し、現在はある国立大学の教授にまで成長致しました。私が会ったときに、その後彼は私に先生のおかげですといいました。そうじゃない、君は柔道を通じて自分自身をリフトアップしたんだといいました。

本日多くの大学の先生方、そして現役の学生諸君が集まっておりますが、とりあえず君たちに与えられているのは勝つことだと思えます。そして、その後はしっかりと先生方に聞いて、その次のステップを踏んでもらいたい。これで終わりではないということを考えていただきます。まとまりのない話で恐縮ですが、私の考えを述べさせていただきます。

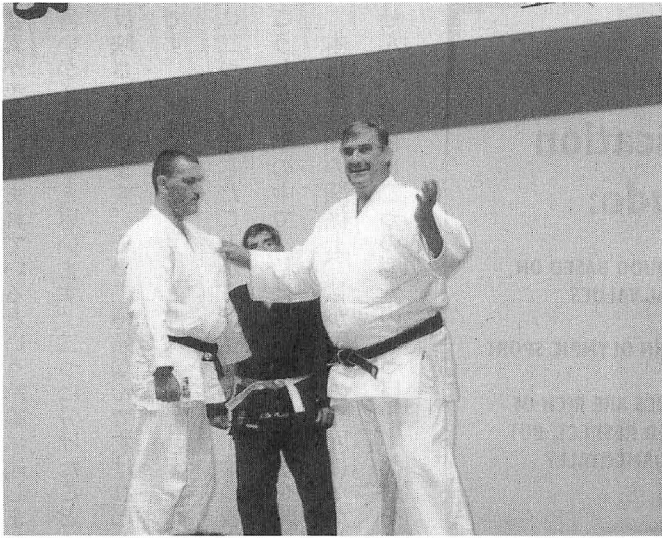
野木 四人の先生にお話しいただきました。風間先生からは、責任ある行動をとる。大人の責任、本人の責任、そういう責任を持った行動が必要ではないかと。芳賀先生には、武道における精神の活用と見方、柔道精神、嘉納治五郎先生が唱えた精神は何なのか、こういうことをお話しいただきました。そして、松本先生は異文化環境研究所所長

ですから、そういう視点からオリンピックに参加すること、オリンピック精神とは、時代とともに毎日毎日に変化する。場所、時間、いろいろな変化に基づいた教育、武道のとらえ方、そういうことを力説していただきました。また、当研究所の中島先生からは「生涯教育としての柔道」および「幼児教育と柔道」についてお話しして頂きました。本当に一言一言、我々は重い言葉を感じております。きょうお集まりの先生方、または学生諸君、本当にすばらしいお話を伺った事と私は思っております。

最後に、いよいよ本日のご案内ゲストでありますヘーシング先生にお話をいただきますけれども、皆さんのお手元にお配りしてあります、『王者たらんと欲する者は、王者らしくあれ』。ヘーシング先生は、日常の行動において王者らしい風格を示しております。東京オリンピックにおいて、両手を挙げて本当に強い、たくましい闘志を、あの画面、日本武道館において受けました。と同時に、勝っても驕らないで、負けた人間に対する労わりを持つ。試合終了のベルが鳴り終った直後にオランダのファンが試合上に靴をはいたまま駆け寄ってきたときに、もし今であれば飛びついて泣きついて、よかった、よかったと讃え合うようになるのではないかと思うんですが、ヘーシング先生は抑え込みの最中に片手を挙げて、待て、後でと制したわけです。こういう場面が、先程芳賀先生が言われたような、武道における相手を労わる精神に通じていると思います。このようなことを強い人は学び、強い人は優しく、より強い人はより優しい精神が必要なのではないか。これが、「いまこそ武道」この精神が今日の我々のテーマだと思っております。

それではヘーシング先生、お話をまず始めていただいて、その後、いろいろと質疑、応答をいただければと思います。

ヘーシング 本日はお招きいただいて、本当にどうもありがとうございました。この場をかりて、私の考えを述べさせていただける機会が得られたことを本当に感謝しています。本日お集まりになった皆様の中に若い方がかなりいらっしゃるということで、私がこれから述べていく考えをそういった若い方に聞いていただけるということをとっても嬉しく思っております。(拍手)



野木 それでは説明に入りますので、パラネーの先生方の移動を行います。

ヘーシング 学長、理事長並びにこちらにお越しくださった皆様、スポーツを愛する私たちにとって、よりよい社会を築いていくためにスポーツが果たした役割は本当に大きいものだということは明らかです。私は柔道発展のためにさまざまな立場から貢献してきましたが、その役割として、競技者、エリートスポーツマン、それから指導者、ナショナルコーチ、国際柔道連盟の教育普及委員会の委員長としての立場でさまざまな活動を行ってきました。その中で常に私が重視してきたのは将来のことです。特にアムステルダムでの体育アカデミーは、私の指導法の中で将来を重視した内容にしています。

東京オリンピック後に総合的に柔道を分析した結果、私は二つの

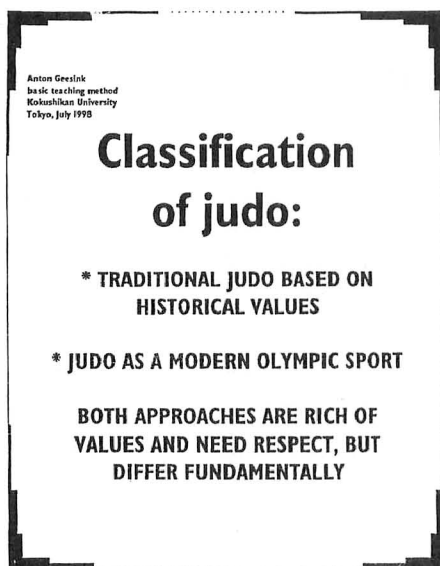


図 1

要素が柔道に含まれているという結論に達しました。それは伝統と、競技です。その二つは過去と未来というふうに言い換えられると思います。二つに分けたことに対しては理由があります。その二つに分けたことが私の指導法にも反映されています。その二種類なんですけれども、一つは、柔道をスポーツとしてとらえ、常にトップを目指す柔道です。(競技柔道) もう一つは、柔道哲学に基づいた伝統的な価値観を伴った柔道ということになります。このように二つに分類したことから、私はカラー柔道着の導入、それから学校教育に深くかかわっていくようになりました。こうした活動の中で、私は基本的な指導法を開発してきました。

本日は時間の関係上、私が柔道の発展にかかわってきたさまざまな活動についてすべてをお話することができませんが、今日は二つの要素の一つ目——柔道をスポーツとしてとらえ、トップを目指すことに専念する柔道、こちらの方を説明していきたいと思います。基本的な指導法に説明を加え、それを実際に行っていきます。今から指導法の説明に入りますが、こちらのスクリーンの方に映し出されますので、通訳がそれを訳していきます。それから、スクリーンに映し出された言葉の中でハイライトされた部分がありますが、そちらの方は後に、さらに深い、より詳しい説明を加えていくようにします。では、始めます。

(図 1) (スライド)

通訳 まず、「Classification of Judo」一番目のタイト

## Important terms

derived from bio-mechanical principles:

**TORI-UKE**  
Stable-unstable

**FUNCTION of the LIMBS:**  
working arm, playing arm, helping arm  
working leg, playing leg, helping leg

**ACTION-REACTION**  
preparation-execution

**STRENGTH-TECHNICAL SKILLS**  
kuzushi and kumi kata

図 3

科学ということですが、これは動きの科学ということなんです。(Bio-)mechanicsというのは生態力学で、その中から安定性、不安定という、この二つをつくり上げています。それから神経生理学ですが、こちらでは行動、それに対する反応といったものを取り上げています。この二

## Classification of judo-technics:

**EDUCATIONAL PRINCIPLES:**

(from wellknown to new skills and  
from easy to difficult skills, combined  
with responsibilities) and

**MOVEMENT SCIENCE:**

(Bio-)mechanics: stable unstable  
and neuro-fysiology: action reaction  
leads to following simple classification:

- INCREASING ORDER OF DIFFICULTY  
(from easy to difficult)
- MUTUALLY RELATED MOVEMENTS  
(family groups)

図 2

ルですが、これは柔道の種類ということです。その次にありますのが、歴史的な価値観に基づいた伝統的柔道。それからこちらの方が現代オリンピックスポーツとしての柔道です。そして、一番最後に説明書きがありますけれども、この二つは価値観ともに深いものがあり、とうとうぶべきものですが、根本的に二つはかなり異なっています。

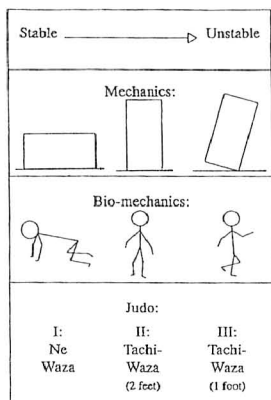
(図2)こちらの方は柔道の技の種類になります。それから、EDUCATIONAL PRINCIPLESというのは教育原理です。

つを以下の分類に持っていくんですけれども、その以下の分類とはこちらの方になります。INCREASING ORDER OF DIFFICULTYというのは、難度を簡単なものから難しいものへと上げていくということです。それからもう一つ、こちらは双方に関係した動きを取り上げています。

(図3)こちらの方ですけれども、生態力学の原理から重要な単語の用語を取り上げてみました。こちらの方は柔道の用語ですが、受けということ、その下に安定、不安定というものが書かれています。それから手足の機能に関するものなんですけれども、ヘーシングさんの方から、このような提起が出ています。working arm、playing arm、helping arm、working leg、playing leg、helping legです。こちらの方をちょっと説明していきます。working arm、working legというのは、技を掛けるときに足、あるいは手を固定している状態のことを指します。それから、playing arm、playing legというのは、そういった固定した状態ではなくて、常に動き回っている手足のことを指します。それから、ヘルピング・アームとヘルピング・レッグですけれども、このヘルピングという言葉からイメージがわくと思いますが、対戦相手が怪我をしないように、技をかけるときに手や足を添えてあげるといったものを指して、helping arm、helping leghelpingと言います。そして半ばに移っていきますけれども、ACTION-REACTIONというのは、掛けと、それに対する反応です。preparationとexecutionというのは、構む、掛けということになります。STRENGTH TECHNICAL SKILLSというのは技術的な能力なんですけれども、その中で特に崩しと組方の関係を示しております。

(図4)こちらの方には柔道の技の種類となっていますが、まず、先程取り上げたものですけれども、容易なものから高いわざへ難度を上げていくということ。それから、双方に関係した動き。そして、動きの科学というものです。

Anton Geesink  
basic teaching method  
Kokushikan University  
Tokyo, July 1978



☒ 5

Anton Geesink  
basic teaching method  
Kokushikan University  
Tokyo, July 1978

## Classification of judo-technics:



\*INCREASING ORDER OF DIFFICULTY\*

\*MUTUALLY RELATED MOVEMENTS\*

\*MOVEMENT SCIENCE\*

leads to:

A: NE WAZA

B: TACHI WAZA (2 feet)

C: TACHI WAZA (1 foot)

☒ 4

Anton Geesink  
basic teaching method  
Kokushikan University  
Tokyo, July 1978

### II: SERIES KESA-GATAME:

Series 1: lighter judoka against heavier

Series 2: heavier judoka against lighter

Series 3: for both categories

### III: SERIES NE WAZA WITH PLAYING ARM

### IV: SERIES HISHIGI

(also to become acquainted with stable-unstable)

### V: SERIES GARAMI

### VI: SERIES SHIME WAZA

☒ 7

Anton Geesink  
basic teaching method  
Kokushikan University  
Tokyo, July 1978

## BASIC TEACHING METHOD:



### A: NE WAZA

#### I: GETTING ACQUAINTED TO NE WAZA

Greeting

Forms of controlling technics

Forms of romping

Responsibility

☒ 6



この三つの概念が以下のものにつながっていきます。そのつながっているものは寝技、それから両足を使う立ち技、片足だけの立ち技を指します。

(図5) こちらの方の図で説明していきますが、まず、この表の左側の方は安定を指します。(stable) それから、こちらの方は不安定な状態を指していきます。(unstable) このメカニックスというのは力学ということです。この力学の図を見ていただくとわかると思うんですけど、その下に、今度はこれを人間に当てはめた生態力学という形になります。そして、その下に寝技と片足の立ち技、それから両足の立ち技というものが出てきます。

(図6) ここで、ついに基本的な指導法というのが出てきますが、まず、寝技について理解を深めるということで、礼、それから寝技の型、抱え方、そして対戦相手が怪我をしないように、相手に対する責任という四つの要素が入っています。

(図7) 次に続けていきますが、(Ⅱ) 袈裟固めですが。軽量の方が重量の人に対戦したとき、(S1)あるいは重量の人が軽量の方と向き合ったとき、(S2)そして両方のケースについて書かれています。(S3)それから、(Ⅲ)こちらの方ですけれども、寝技で手を一つのところに固定するのではなくて、常に動き回る手を伴った寝技。(Ⅳ)それに、挫とありまして、こちらの方は安定、不安定という、先程ご紹介したコンセプトに関するものです。(Ⅴ)それから、こちらの方は絡み技、(Ⅵ)締め技というものが出てきます。

(図8) こちらの方は両足を使った立ち技ですが、(Ⅶ)次は、立ち技の十二段階ですね。まず、(1)が組む、(2)が受け身の技、それから膝車といったものが、1、2、3と出ています。(Ⅷ)続きましてはPLAYING ARMS。先程ご説明いたしましたが、一カ所に固定するのではなくて、常に動き回っている腕を伴った立ち技です。それに対し

## C: TACHI WAZA (one foot)

### IX: TACHI WAZA WITH PLAYING LEG

#### X: BARAI TECHNIQUES

#### XI: GARI TECHNIQUES

## D: SPECIAL ITEMS

### XII: RENRAKU WAZA

### XIII: GONOSSEN

### XIV: KATA

## B: TACHI WAZA (two feet)

### VII: PREPARATORY STAGE OF TACHI WAZA:

1. Taking hold
2. Falling technique
- 3: Form of Hiza guruma

### VIII: TACHI WAZA WITH PLAYING ARMS

1. Basic series
2. Special series

図 9

二つとは、作と掛を指します。その中で受けと取りという要素があります。そして、その中でどなたが受けて、どなたが取りなのか、その役割をはっきりさせる必要があります。このような形の組み方では、どちらでも取りでもなく、受けでもないような形になります。取りが安定した状態で、受けが不安定な状態の方を指します。ですから、こういった形の中でどういうふうに組むのかということが重要になってきます。組み方には距離がかなり関係していて、それはセンチメートルな世界まで関係してきます。こういった動きは論理的では

図 8

て(1)基本編と(2)特別編というものがあります。(図9)そして、こちらですけれども、片足の立ち技、それから立ち技で先程ご紹介しましたが、一カ所に足を固定するのではなくて、常に動きを出している足を伴った立ち技ということになります。その中で払い技、それから掛技というものが含まれています。最後に特別項目として、連絡技、返し技、それから形となります。以上です。

ヘーシング 柔道には二つの重要な要素があります。その

ありません。生態力学の観点では、引っ張る動きに対して止まるというか、反抗する動きが出てきます。対戦相手を右手で投げるときに、左手の重要性というのはほとんどありません。今から説明したことを実技で行います。(実技指導)

今、見ていただいているように、左手は全く使っていない状態です。このように左手を使わずに、両足を畳にしっかりつけた状態で技を掛けています。常に同じ原理で動いていて、右手を使っているという状態です。今の部分が私の指導法の第一部となります。大腰で相手の安定性を崩すのではなくて、両足を畳についた状態で相手の安定性を崩していくというふうになります。

これから左手の方を使うものをやってみます。今、対戦相手が逃げている状態ですが、これを防ぐために右手で掛けていくようになります。そして右手で掛けたところを、相手が逃げないように左手で抑えていくという形になります。生態力学の観点から、こういうふうに釣り上げる形というのは論理的ではないので、強い力で引っ張っていくという形になります。

昨日こちらの柔道場で高校生の練習を拝見した時に、こういった動きをしている方がたくさんいらっしゃいました。そして、いつも左側を重視して、右手をかけた投げ方を考えていたようですけれども、こういった練習の中から、対戦相手は人間らしく人形のような動き方をしていると見えました。ですが、自然な動きとしては、引っ張られた方はそれに対して引き戻すという力を出すのが普通です。自然上では、このようになります。お互いに引っ張り合う動きですね。

先程のスピーチの中で説明しましたが、柔道には二種類あります。私は、先ほど柔道には競技の部分と伝統

の部分があるとお話ししました。一つの要素が試合になります。もう一つの要素というのは、柔道哲学に基づいている伝統的な価値観を伴った柔道ということです。競技者として、一時は強くあったと思います。若いとき、強かった私がだんだん年を重ねて、そうした競技生活に終わりを告げてから、武道としての柔道の道を歩いていくようになります。一生、練習し続けていくことができます。ですから、今、競技者として試合に打ち込んでいらっしゃる若い方には伝統的な価値観を押しつけるのではなく、スポーツとしての柔道の側面を指導してあげるようにして、その人たちが年齢を重ねて、どんどん競技界の方から遠ざかってきたときに、武道としての柔道を紹介するような形にしたいと思います。

ですから、私は子供たちを指導するときに伝統的な価値観を教えるのではなく、そのときは国際的なスポーツとして柔道を教えています。最初はスポーツとして子供たちを指導していくわけ訳ですけれども、そうする中で子供たちが、では、背負い投げというのは、一体、どうしてそういったものになったのか。それから、大腰というのはどうしてそういうふうになったのかという疑問を持つようになります。そうした自発的な興味から、先生方に質問していくようになります。私は皆さんの年齢ぐらいの孫を持っていますけれども、今思うことは、若い世代にとって柔道がおもしろく、なおかつ理論的なものであるということをアピールすべきだと思っています。

では、二番目のグループに入っていきますけれども、足技、そして組み方を行っています。同じような動きをします。釣込み腰です。ここでは右手で釣ることにします。釣込み腰ですが、こちらが先程見ていただいた両足を畳にかけた状態と、片足だけの状態の関係をつなぐものになります。このように引くということは論理的ではありません。体落しの原理も、このようなものです。強い方だけを引っ張ることができ、片手だけで行います。生態力学の論理に

基づいた方法です。払い腰も同じカテゴリーに属します。この動きの中で腰が一番強い部分になってバランスをとっています。そして、すべてが右手の動きによって可能になっています。これが私の指導法の第二部となります。これはファミリーグループの一つのカテゴリーとしてとらえています。

そして、三番目のグループが一番特殊なものとなってきます。払い技です。間接的な崩しです。払い技では腰が逃げる形になります。そして、学生にどのように払い技をかけるのかを指導していきます。右腕だけで、そして十分に力があれば、こういった動きも出せます。私の好きな得意な技です。皆さん、違いがわかると思います。腰だけが中に入っています。

今回、このような形で皆さんに発表できたことを心から嬉しく思っております。三十分後に柔道場の方でまた始めますので、そちらにもいらしてくださいを祈っています。

野木 皆さん、こちらに注目いただければと思います。ヘーシング先生並びにフランケン、フルートス、ステンゲンガ各先生にひとつ大きな拍手をお送りください。(拍手)このような解説入りのヘーシング先生の指導というのはなかなか見れないし、また、聞けないことでございます。このような先生の心の込められたご指導をいただき、感謝申し上げます。本当にヘーシング先生、ありがとうございました。

今お話しいただいた中で、皆さんのお考えで、ご質問があれば手を挙げてお願いしたいと思います。学生さん、どうですか。今、ヘーシング先生のご指導をいただいた点について、今までのイメージが全く変わった方がたくさんいるんじゃないかと思っています。こういうときじゃないと聞けないと思います。いかがでしょうか。

西田 山梨学院大学の西田と申します。現役時代、日本で練習をずっとされていたと思いますが、地元オランダで

の練習について、当時、オランダでの練習相手がかなり不足しておられたのではないかと思うんですが、その辺のオランダでの稽古相手の不足の中で、どういう工夫をされたか、またどういうところに注意をしながら練習を積まれて強くなられたのか。もしよろしければ、その辺のことを伺えればと思います。よろしく願います。

ヘーシング オランダはご存じのとおり小さな国で、自国独自だけでは存在できない国なので、海外からの影響を積極的に受け入れているところがあります。その一方で、日本というのは島国ですけれども、かなり経済大国になっていて、そういった意味で、自分の国だけで独自に存在できるような考えを持っていらっしゃる方もいるかと思いますが、それはちょっとした誤解かと思います。

オランダは小さな国ですけれども、それだけ海外にも行く機会がかなりあります。選手の方々で今日本にいる方もいますけれども、これから韓国の方にもトレーニング、試合等で行かれる方もありますし、海外でかなり柔道の経験を積んでいるという土壤があります。それから先生の方も充実しています。常に新しく先生を雇用していくような形になっているので、そういった中で柔道が発展してきています。

日本の柔道界は割と伝統的な部分をかなり重視しているようなのですが、先ほど私がお話ししたとおり、柔道には二つの要素があり、一つは伝統的なもの、もう一つは現代スポーツとしての柔道です。私は指導法の中でも重視してきましたけれども、この二つの要素をはっきりと分けて取り扱っています。というのは、伝統を重視するとスポーツとしての柔道が軽視されたり、スポーツとしての柔道を重視すると伝統が失われたりといった危惧があります。この二つを両立させることはすごく困難だと私は思うので、この二つをはっきり区別し、若い方には特にスポーツとしての柔道を推奨していきます。そして私のように、若いころはかなり強い柔道家だった者がだんだん年をとっていく

につれて、スポーツとしての柔道が自然と伝統的な柔道の方へ移り変わっていくという流れになっていきます。

私の練習法ですけれども、今の方たちと同じように海外で遠征して、いろいろな国の方々と対戦して練習を続けていたということです。それから、オランダでの柔道という意味ではほとんど変化はありません、しかし、日本の柔道は変化してきていると私は思います。

野木 ヘーシング先生、ありがとうございます。丁寧な答えをいただきまして感謝申し上げます。きょう来ている学生諸君は、東京オリンピックのときには生まれていなかったかと思っています。

ヘーシング 若い方たちにメッセージなんですけれども、オランダというのは小さな国ですが、スポーツがかなり盛んな国です。それというのも、多分、その背景に文化的なものがあると思います。オランダの人たちは何か行動とか何か物事に対して、どうしてこういうふうにするんだろうとか、なぜこういうふうになっているんだろうと常に疑問を口に出して、それを説明していこうという心の動きがあります。日本の方は、そういったところを少し遠慮なさる方が多いのではないのでしょうか。今、この機会に私がこちらにいるので、もしお聞きになりたいことがあったらぜひ質問してください。オランダの諺にもありますけれども、「何か尋ねなければ何も得ることはできません。」ですから、疑問に感じていること、何か理由を知りたいことは必ず口に出して聞くようにしないと、発展、向上につながっていかないと思います。質問がある方は遠慮せずをお願いします。

飯島 飯島大学の飯島と申します、ヘーシング先生がかなり力を入れてカラー柔道着の推進をお図りになっていると聞いておりますけれども、現在の状況をお話し願いたいと思います。

ヘーシング 三十一年前にカラー柔道着を紹介いたしました。カラー柔道着の件についてですけれども、議論の末、

三十年間かかって、この前、国際柔道連盟の方からようやく受諾を受けました。二〇〇〇年のオリンピックから導入が決まりました。それから、カラー柔道着のほかにもう一つ提案したのが畳の色を変えるということなんですが、畳の赤い線の外側の色を違う色にする。つまり中側と外側の畳の色を変えることによって、観客によりわかりやすい柔道の試合を見せるということで、そちらの方も提案いたしました。

野木 ありがとうございます。先ほどお話が途中になりましたが、ヘーシング先生は東京オリンピックのときは天理大学の道場で松本先生（故人）のご指導をいただいて、オリンピックの優勝を目指していましたが松本先生が日本チームの監督を務めていたわけです。その点では悩まれ、苦しまれた状況が、当時、我々に伝わったわけです。それを突破して、新しい感覚における柔道の発展に寄与したわけであります。

そういう意味で、きょうヘーシング先生のこのご講演が、また、このシンポジウムにおけるお話が大変なインパクトを与えているのではないか、恐らくいろんなところでいろんな刺激を受けたことと思います。カラー柔道着を提案された先生そのものが、今、ここに来て、そのお話をしているわけです。そういう意味で、いろんな角度から先生のメッセージをよく読んでいただければ、ヘーシング先生が何を言わんとしているかが一目でわかるわけですね。若い学生諸君、選手の皆さん、時代とともにどう変化していくかという先程の松本先生（サンフランシスコ州立大学）のお話、そしてまた、他の先生方のお話がありますが、もう一つつけ加えて、ひとつ芳賀先生からお話をいただければと思います。芳賀先生、よろしく願います。

芳賀 若い皆さんが出席されているので、一言つけ加えさせていただきたいと思っています。先程私は武道というものは何かということで、武道を通して①勇気のある人間にならなければならない。それから、②我慢強さを持て



る人間にならなければいけない。それから、③人に優しいという心を持たなければいけない。それからもう一つは、④礼儀正しくなくてはいけないということを申し上げましたが、私は同じように別な大学で、日常、学生諸君に接しているものですから、そこから経験していることを一つ、二つ言いますと、皆さん、早いうちに、おれは何になろう、何の専門家になろうということを決めて猛烈に勉強してください。そして、武道の何かをやってください。それがまた、自分をつくる一番大きな力なんです。早く目的を決めることです。これをぜひ忘れないように、皆さんにアドバイスしておきます。

それからもう一つは、人間というのは自分だけじゃなくていろんな人がいますから、世の中では礼儀作法が非常に大事なんです。それは言葉使いの礼儀作法もあるし、礼の仕方もあるし、いろいろあります。あるいは、着ているシャツもあるんですね。余り汚いものを着ている人はだれでも考えるところがあるんです。ですから、人に笑われないきちとした——何も高級なものを着ろとか、そういうことを言っているわけではないんですよ。人に見られても恥ずかしくない服装をして、きちとした言葉使いをする。それがいつでもできる。そしてもう一つは、きちとした礼儀作法ができる。これが人と接する上で非常に大事なことです。

今の日本の若い人たちに欠けているのは、むしろこちらの方なんです。ですから、そういう意味で武道をやっている者は率先して、いわゆるきっちりとした行動ができる人間になってもらいたいと私は思っています。今の日本において不足しているのは、むしろそういうこと。だから、先生を先生と思わないし、お互い同士でよくない言葉使いが多い。女子においても非常に荒い言葉を使う。これは事実ですね。だから、武道を行っている人間であれば、皆さんはこれからの日本の模範になるような人になってもらいたい。

先程ちょっと私が言いましたけれども、礼儀作法がしっかりしているということは、頭で考えて礼儀作法をしっかりできる人間になっているということです。頭の働きというのは、いわゆるその人間の動作を示しますから、人格としても素晴らしいものを持った人になれるわけです。ぜひ皆さん、早いうちに自分が何になるかという目的を見つけて、決めて、そして努力していただきたい。ぜひお願いを申し上げておきたい。

野木   ありがとうございます。ひとつ皆さん、力強いアドバイスをよく心にとどめておいてください。

きょうは、この会場に東京学生柔道連盟会長の野田先生（法政大学教授）および地元世田谷区柔道会会長の角田先生がお見えですので紹介させて頂きます。

そして、きょうは開演から長時間にわたって、実は御年九十五歳、明治三十七年生まれの草地先生がお見えです。ご紹介申し上げます。このように、九十五歳となる先生がずっとお聞きになっていただいております。国士館高等学校の校長先生を五年奉職され、銃剣道連盟会長、現在は歴史をずっと研究しておられます。このような先生も、このシンポジウムに非常に関心を持って、最初から最後までお聞きいただいております。

また、テックコンドー連盟会長でおられる塩谷先生もおいででございます。

大東文化大学の武内教授もお見えでございます。

きょうはたくさんの方々がこの会場にお見えになっておられます。長時間にわたって、このシンポジウムをお聞きいただき、ご協力いただきましたことを本当に感謝申し上げます。パネラーの先生方、ありがとうございます。次に、第二部（実技指導）、第三部（二十周年祝賀会）もございます。それでは司会を移らせていただきます。

司会   パネラーの先生方、どうもありがとうございました。もう一度皆様、盛大な拍手をお願いいたします。

長時間にわたりまして、ご清聴ことにありがとうございます。以上をもちまして、国士舘大学武道徳育研究所設立二十周年記念国際シンポジウムを終わらせていただきます。

なお、これから第二部と致しまして国士舘大学の武道体育棟二階の柔道場におきまして、ヘーシング先生、そしてプロフェッサーの各先生方の実技指導がございますので、お移りいただければと思います。また、第三部として今晚六時半から赤坂のキャピタル東急で祝賀会を開催させていただきます。

## 第二部 実技指導

15:30  
～  
17:00

国士舘大学武道体育棟2階柔道場

指導：アントン・ヘーシング

Professor Martin, Franken

Professor Jose, Luis de Fruton

Professor Harry, Stagennga

ヘーシング 先程第一部でご説明致しましたが、どれもポイントかわからないので、もう一度、こちらで説明いたします。組み方がポイントですので今、釣込み腰で説明致します。引くことによって、相手の足が必ず前に出てきます。これが要素です。組み方が一番重要なポイントです。遊びがあってもだめなんです。本当に一センチのポイントです。引くことによって、必ず相手が前に出るということを頭の中で考えて動かなくてはいけないわけです。絶対相手はじいっとはしていないんです。自分が引くことによって相手が必ず前に出てくるということを頭で考えて、そして次の動作をするわけです。みんなやってみてください。

先程シンボジウムの方で西田先生が私に、どうしてあなたは強くなったのかというご質問を受けました。そこで西田先生に答えたのは、私はオランダの中でも非常に激しいトレーニングを重ねましたと答えました。きのう私はこちらを訪ねたしまして、またこの道場で練習をいろいろ拝見致しましたけれども、学生諸君はちょっと甘いところが

あると思います。見てのとおりですね。全く何もしていない。ただ、体を動かしているだけのこと。たった今から仕事を始めてください。崩し、作り、崩し、作り、これが仕事だと。受けは、ただ足を引っ張られて前に出すだけです。

中島 それでは、ここで先生方に花束贈呈があります。花束を渡してくれる子供たちは国士館少年部、それから地元桜小学校の幼学舎の子供たちです。

ヘーシング きょうは本当に若い人たちに沢山集まって頂きとてもうれしい。短い時間で沢山のことを述べるということはできないと思います。きょうは短い時間だから、少ししかできなかったがもしチャンスがあれば、もう少し長い時間をとって、みなさんと一緒に練習したいと思います。子供たちやご父兄の方、そして先生方、お集まり願います。まして非常に感謝申し上げます。

### 第三部 記念祝賀会

18:30  
〜  
21:00

赤坂「キャピタル東急ホテル」

#### 式次第

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 司 会             | 泉 賢 司 (武徳研究所助教授)                           |
| 開会の辞            | 北 川 典 子 (武徳研究所助教授)                         |
| 武徳德育研究所<br>所長挨拶 | 野 木 将 典 (国士舘大学教授・武徳德育研究所長)                 |
| 館長挨拶            | 柴 田 梵 天 (学校法人国士舘館長)                        |
| 学長挨拶            | 三 浦 信 行 (国士舘大学学長)                          |
| 理事長挨拶           | 西 原 春 夫 (学校法人国士舘大学理事長)                     |
| 世話人代表挨拶         | 森 喜 朗 (衆議院議員)                              |
|                 | 前 川 昭 一 (和敬塾塾長)                            |
|                 | 笹 川 武 勇 (アジア留学生協会 専務理事)                    |
|                 | アントン・ヘーシンク (IOC委員、世界柔道連盟十段、東京オリンピック金メダリスト) |
| 御来賓祝辞           | 草 地 貞 吾 (歴史研究家、国士舘大学武徳德育研究所顧問)             |
| 記念品贈呈           |  |
| 花束贈呈            |  |
| 乾 杯             |  |
| 祝電披露            |  |
| 御来賓挨拶           | デービット・松本 (サンフランシスコ州立大学教授)                  |
|                 | 尾 又 正 則 (東大和山市長、元国士舘大学教授)                  |
| ☆アトラクション        | (国士舘大学杖道部、国士舘大学拳法部 各部員)                    |
| 演 舞             | (風間 健、気練 武心道道主)                            |
| 試 割             |  |
| 日本伝統文化・和太鼓演奏    |  |
| 閉会の挨拶           | 小 森 富士登 (武徳研究所助教授)                         |

開会の辞・北川 本日はお忙しい中、私ども国士館大学武徳徳育研究所設立二十周年記念祝賀会のためにご参集くださいまして、まことにありがとうございます。特に本日は、この日のために遠路はるばるお越しくださった方々、そして、この日を機に当研究所がより発展しますことを祝し、また、ご支援くださいます皆様方に、このように多くお集まりいただきましたことを心より御礼申し上げる次第でございます。これからのひとときを、どうぞごゆっくりとおくつろぎいただければ幸いと存じます。まことにありがとうございます。

野木 本日は、ここにお集まりの方々ほとんど突然のお誘いだと思います。大変申しわけないことをしたと、私は

まず挨拶の前にお詫を申し上げます。突然のお誘いで本当に申しわけありません。当研究所は、無事に二十周年を迎えることができました。これも、ひとえに皆様方のおかげと深く感謝申し上げます。明治維新の橋渡しとなった吉田松陰は、「身はたとひ武蔵野の野辺に朽ちぬとも、留めおかまし、大和魂、かくすればかくなるものと知りつも、やむにやまれぬ大和魂」。この言葉をあすの日本に託して亡くなりました。当研究所は、この精神を持って二十年前に産声を上げ、今日、見事二十年の成人を迎えることができました。これからも国士館大学発展のために、また、国家発展のために、人類に寄与するために武徳徳育の研鑽を重ねてまいりたく、かたく信じております。これからもよろしくご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。きょうはありがとうございました。

—— 続きまして、国士館学校法人国士館館長柴田梵天先生に一言ご挨拶をお



願います。

柴田 皆様、お久しぶりです。皆様にお目にかかれて本当にうれしく存じます。私も小さいときから諸先生のご指導を得て教育に従事し、こうして今日に至っております。それはご指導いただいた諸先生並びに同輩の方々のおかげであります、また今日もここにお見えになっておられると思い、心から感謝を申し上げる次第であります。私も八十を超えて、人間らしく病気をするようにになりました。しかし、気持ちは本日のこの会の精神によって生きております。これは単にこの会ばかりでなく、これからの日本、世界にとって、まことに大事なことと思います。

国士館はご承知のとおり、立派な先生方が真に神を信じ、日本を盛んにするために若い方々に教育をした次第であります。その精神はいつまでも残っているかなければならないと思います。私は病気のために、心に思っている万分の一も話すことができません。どうぞ皆様、お体を大事にしてください、そうしてきょうのこの会をご支援いただき、相共に手を携えて、他面、また真の武道精神を発揮して、我が日本を世界に誇れるような立派な国にしていだきますように心からお願いいたします、きょうの会のご挨拶いたします。どうも皆様ありがとうございます。

—— つづきまして、国士館大学学長の三浦先生よりご挨拶をお願いします。

三浦 ただいまご紹介にあずかりました国士館大学の学長の三浦でございます。本日は、本学の武徳研究所二十周年記念に際しまして多数の方々がお集まりいた





いただきましたことを、まずもって御礼申し上げます。ありがとうございます。

国士舘大学武徳研究所は、先ほど野木所長からご挨拶がありましたように、本日の混迷する世の中で、武道、それから徳育というものが非常に大事だと思い、研究所は先代の総長がおつくりになりました、本当に肝いりで設立した研究所でございます。きょうは、この研究所の二十周年記念に際しましてオランダからヘーシング先生をお招きし、そして大学においてシンポジウムを終え、その後、第二部として新しくできました柔道場において近くの中・高校生200余名を集め実技指導が行われました。また第三部として記念祝賀会が只今盛大に行われ、本当にこの二十周年記念にふさわしい催し物であり、全学挙げて喜んでおる次第でございます。

また、これから日本、社会、教育、そして産業、すべての面に厳しい状況になろうと思いますが、私どもと研究所のこれからの大きな課題がここにあるかと思えます。どうかお集まりの皆様方のご支援を得まして、この研究所がますます発展されることを祈りまして、学長といたしまして、お願いやら、あるいは感謝の気持ちを申し上げまして、簡単ではございますが、挨拶にかえさせていただきます。本当にきょうはおめでとうございました。

—— 続きまして学校法人国士舘理事長西原先生よりご挨拶を頂きます。

西原 初めてお目にかかる方も多いようでございますが、この四月一日から国士舘の理事長という大任を仰せつかりました西原でございます。今後ともよろしくお願いを申し上げたいと存じます。



野木所長から、武道徳育研究所設立二十周年を記念して国際シンポジウムを開催したい、こういうお話を伺いまして、そのテーマである「いまこそ武道——21世紀における武道教育の役割——」を伺いました。私は、もうすっかり共鳴をいたしました。

と申しますのは、私も長年、教育に携わってまいりましたけれども、日本の教育はこれでいいんだろうかという大変大きな憂慮を抱いているからであります。青少年の非行、いじめ、不登校、ナイフによる殺傷事件、そういったものの原因は大変深く、複雑であるけれども、やはり教育の中にびりっとしたところが欠けているのではないであろうか。それを改める一つの方法として、少なくとも小学校の高学年や中学校に武道を導入する、できれば、これを必修にするという運動が必要ではないだろうか、こういうことを考えていたからであります。

“礼をもって始まり、礼をもって終わる”という言葉を先生が口で生徒に言ったのでは、決して生徒の胸には突き刺さらないであります。しかし本来、そういうものを児童にやらせることによって、現在欠けている礼節、道徳を心の奥底に沈み込む、刻み込む、これができるのが武道ではないだろうか、このように考えたからであります。このためにお忙しいところ、わざわざオランダからヘーシング先生初め、多くの方がご参加していただき、この席をおかりして、改めて心から感謝を申し上げたいと存じます。

そして、国士舘大学武道徳育研究所並びに国士舘はご承知のように、武道精神、



文武両道ということをまさに建学の精神の大きな柱にしております。現に中学、高校では剣道か柔道が必修になっています。この国士館のあり方は一見すると、何か古めかしく後ろ向きのように見えるけれども、実はそうではなくて、今になってみると、むしろ時代の最先端を行く教育方針を堅持していることになるのではないだろうか。少年のあり方について憂慮しておられる多くの大人たちは、きっとこのことに気づかれるに違いないと、こういうふうと考えておるところでございます。

そういう意味におきましても、この武道德育研究所が設立二十周年を機といたしまして、まさにおれらの出番が来たんだということで、ますます活躍されることを理事長として心から念願いたしまして、私のあいさつにかえさせていただきます。本日はまことにおめでとうございます。

—— 引き続きまして祝電を御披露させていただきます。

『研究所設立20周年記念祝賀会の開催を祝すと共に、ご参集の皆様の益々のご研鑽とご健勝を心より祈念致します。』

海部 俊樹

『国士館大学武道德育研究所が設立二十周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。』

私も代表世話人のご指名をいただき是非ともお祝いに伺うことを楽しみに致しておりますが、御存じの通りの政局となり出席出来なくなりましたことを深くお詫び申し上げます。

二十一世紀を目前にして、わが国は政治・経済は申すに及ばず文化やスポーツを含め教育全般におきましても、大変な事態に直面致しております。

いま、最も必要なことは、日本の将来を担う人造りにあります。



国士舘大学の建学の精神にもとづいて、文武両道の精神を身をもって実践・普及しておられる貴研究所のご活躍がまさに、この問題の解決の原点であり、今日の混迷を打開するものと思われまふ。

この度のシンポジウムが実り多い成果をあげられ、貴研究所の益々の御発展をお祈り致しますと共に関係のみなさん、さらに国士舘大学のより一層のご隆盛をご祈念申し上げます。

自由民主党総務会長 衆議院議員 森 喜朗

—— それでは、次に財団法人和敬塾の塾長でいらっしゃいます前川昭一先生よりご挨拶を頂きます。

前川 和敬塾の塾長で前川と申します。きょうは大変おめでとうございました。私ども財団法人和敬塾とこの大学とは、特に姉妹校でも何でもないのであります。が、私どもの財団法人和敬塾の設立の趣旨と、この大学、なかなか武道德育研究所とは全く同じ考え方です。この大学、なかなか武道德育研究所とは全く同じ考え方です。私ども学生のご指導をいただいております。

和敬塾をちょっとご説明申し上げますと、今から四十三年前に設立致しました。戦後の日本の大学教育というのはチョットおかしいということが発想の原点でした。きょうは西原先生がいらっしゃるので、生意気を言うとおしかりを受けるかもしれませんが、実は西原先生も早稲田大学の総長の時分に、私どもの和敬塾の理事をお願いいたしました。

これは四十年ほど前に私の父が考えたことですが、どうして日本の大学教育はおかしいか。そのとき父の頭にありましたのは、やっぱりオックスフォードやケンブリッジのイギリスの大学でございまして。ご承知のとおり、ユニバーシティと言っているのは、実はそれはカレッジの集まりで、カレッジというのは学寮です。つまり学生というのは勉強する場合、まず寮へ入る。寮へ入って、そこで学者、先生、チューターと一緒に生活することによって英国紳士ができていくんです。そのカレッジから、いろんな学校へ勉強に行く。また帰ってくる。つまり大学の教育の中心というのは、イギリス・ジェントルマンをつくるのが基本でなければならない。

そう考えてみると、日本の大学というのは学歴偏重といえますか、知識偏重といえますか、徳育が完全にえぐられている。したがって、日本の大学に徳育というものを根づかせられないのだろうか。そういうことを考えて財団法人和敬塾をつくりました。ちょうどその時に肥後のお殿さんの細川さんのお屋敷を買い、財団法人にして現在までやっている次第であります。

そういう日本の大学教育の中に徳育というものを入れたい。これは私どもの力ではなかなかできない事ですけども、そういう志を持って四十三年目へと入りました。そこで中島先生に柔道のご指導をいただいております。単に柔道の技術だけではなく、中島先生の人柄を通じて、そういう徳育の面もご指導をお願いしております。その和敬塾柔道部の中で、いつも先輩が中島先生を慕ってやってきます。私は中島先生には日ごろから感謝しているわけでございます。そんなわけで、中島先生より今日の会の発起人の依頼があったので喜んでやらせていただいたわけでございます。

私どもにつきましても、和敬塾と本学の建学の精神が全く一緒であることを非常に頼もしく思っております。どう

ぞひとつこの大学が、そして、この研究所がますます発展されますことを心から祈念いたしたいと思います。ありがとうございました。

—— どうもありがとうございました。次にアジア留学生協会専務理事でいらっしやいます笹川武勇先生より御挨拶を頂きます。

笹川 柴田館長さん、野木所長さん、二十周年おめでとうございました。私がきょうこういう高い席に呼ばれたのは、私の大学がもとと福田赳夫先生の心と心のコミュニケーションということで始めまして、それからご承知のように、きょう政局が多端でお見えにならなかった森喜朗先生がアジアとの交流を始めようということで財団を始めまして、その福田赳夫先生、森喜朗先生が柴田館長さんを初め、国士館の方々と非常に親しいご関係にある。それで一言お祝いを申し上げると、こういうことでここに呼び出されたんだと思います。もともと私は福田赳夫先生や森喜朗先生の原稿書きをしていまして、人に挨拶させるのは上手ですが、自分で挨拶したことはないものですから、大変失礼なことと思います。

留学生に限って申し上げますと、国士館はアセアンを初め、中国その他にいろいろやっていらっしやいます。私どもは毎年、福田先生や元文部大臣の森先生のお世話で、いろんなところからお金を集めまして百何人の留学生をやっています。昨年以來、特にアジアの国際通貨危機がございまして、アセアン各国からの留学生がうんと減りました。私たちの仕事も大変大事だと思っていますし、もし国士館がこれからアジアと申しますか、世界各国からお呼びになるときは私たちも協力したいと思っています。きょうはささやかながら、この研究所を初め、もし国士館がいろんなことで留学生のことがありましたらご相談にあずかりたい、そういうことで私のご挨拶いたします。



私自身、武道については、昔、学生時代柔道二段で、本当に一番下の方で何も申し上げることはありませんし、徳育については余りまじめな学生ではなかったから何の資格もございませんが、今回、留学生については責任ある講演をいたしまして、ご挨拶にかえさせていただきます。どうもおめでとうございます。

では最後に今日のスペシャルゲストのアントン・ヘーシング先生よりご挨拶を頂きます。

ヘーシング 日本の皆様、徳育研究所所長、また国士館の皆様、こんばんは。皆さんもご存じのように、日本は私の第二のふるさとでございますので、毎回、日本に来るたびに家に帰ってきたような感じがいたします。また、今回は二〇〇〇年に向けて、この武道がどうあるべきか、そういった国士館大学武道徳育研究所のセミナーにも参加させていただきましたけれども、皆様に参加していただき、新たな視野が開けたと思っております。時間の関係で、ここでは長いお話はできませんが、きょう一日、このセミナーで二〇〇〇年に向けての柔道のあり方、武道のあり方をお話ししてまいりました。私、または私の友人三人をここに招いていただき、本当にありがとうございます。こよい皆さんも楽しんでいただけるよう心からお祈り申し上げます。ありがとうございます。

—— ヘーシングさんからご挨拶をいただきました。

それでは引き続きまして、田中伸幸さんの手づくりの創作人形がここで贈呈されます。パネラーをしていただきます

したヘーシングさんと、実技指導してくださいました三人の先生方——ステンゲルガ先生、フルートス先生、フランケン先生にお渡ししたいと思います。

（記念品贈呈）

今、ヘーシング先生に渡されました人形は『至誠』と書きまして、わざわざヘーシング先生のために田中伸幸先生がつくってください、博多から持参してくださいましたのでございます。そして、残りの三先生に贈られております柔道人形ですが、これは『負けてたまるか』という名前がついておりまして、この名前は国士舘大学の柔道部のキャッチフレーズとなっております。

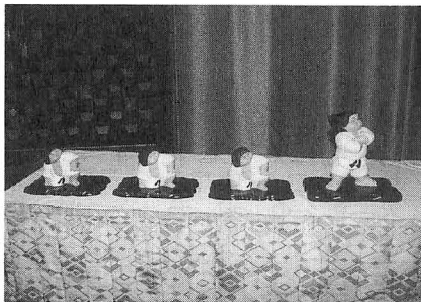
それでは、続きまして花束の贈呈でございます。全日本着物装いの女王でいらっしゃる雅優香さんからヘーシングさんへの花束贈呈でございます。ほかの三先生方にも花束の贈呈がございます。

（花束贈呈）

—— どうもありがとうございました。

続きまして歴史研究家の草地先生に乾杯のご発声をお願い致します。

草地 ただいまご紹介いただきました草地でございます。私は明治三十七年の生れで、父から、おまえの耳には、一部、戦争の大砲の音が入っておるはずであるということをお子供の時分に聞かされたことがございます。生れは、北九州でございますから、



〈記念品贈呈〉 創作人形師 田中伸幸先生



も飛び上がりました。そのときは何で日本が負けるんだという気がしましたが、この国際化の今日ですから、オラン



明治三十八年の五月二十七日、二十八日には、日本海開戦の砲声  
が玄海灘の方から北九州の方に向かって来たという話でございま  
した。

そういう年長のゆえをもって、本日の乾杯を指名されたのかと  
思うのですが、本日は東京オリンピックの柔道の優勝者で  
いらっしゃいますヘーシング先生初め、オランダ、あるいはイタ  
リアからご来会いただきまして、午前、午後と引き続き国際シ  
ンポジウムを拝見しました。また、実技の指導も拝見しまして、  
若い人が一生懸命やっている姿はいいですね。涙がこぼれる  
気がいたしました。本当に先生方ありがとうございました。

武道館が昭和三十九年、また、同時に東京オリンピック、新幹  
線も都心にできましたから、私は昭和三十九年、西暦にして一九  
六四年、東京オリンピック、それから武道館、新幹線という二つ  
の事で覚えておるわけであります。それがちょうど六十才ぐらい  
でございました。今日の前に見えているような気がいたします。

ヘーシング先生が勝ったときにはテレビを見ておりましたが、私



ダであれ、インドネシアであれ、インドであれ、柔道が発展することであるならば、と思いました。また、今日は武道徳育研究所の二十周年の記念式典でございます。本当にありがたいと思いました。

さきほど学長先生、あるいは理事長先生からお話がありましたが、礼に始まり礼に終わる。節度を持つ、道徳、こういうものが、この武道によって形成されるわけでございます。本日はこの研究所の二十周年をお祝いし、同時に国士館のご発展を祈り、また、ご来会の皆様のご健勝を祝しまして乾杯の音頭を取らせていただきたいと思います。

国士館大学武徳研究所の二十周年をお祝いし、同時に大学、また、本日も来会の皆様方のご健勝を祝しまして乾杯をいたしたいと存じます。乾杯！

—— ありがとうございます。国士館高校の校長先生を長年奉職され、明治生まれで、実は草地先生はことし九十五歳になられます。とてもお元気でいらっしゃいます。どうもありがとうございます。

続きまして元国士館大学政経学部教授で現在東大和市の市長の尾又先生よりご挨拶をいただきます。

尾又 ただいまご紹介いただきました、私、東京都の東大和の尾又でございます。本日は武徳研の二十周年行事、まことにめでとうございます。私は二十八歳で明治の大学院を卒業して、国士館の助手、講師、助教授、教授を二十年間させてもらいました。その間、大変お世話になりました。今、私が市長として頑張っていけるのも、国士館で



先輩、同僚に教わったことが大きく左右しております。改めて過去二十年間の国士館の皆さんのご指導に感謝をしております。私の心のふるさと、国士館が発展し、永久的な礎を築けるよう祈念します。武徳研と国士館の発展、さらに皆様のご発展を祈念申し上げます。私は今後とも市長を通して、国士館で学んだことを世に広め、とにかく国士館魂で市長職を続けたいと思っています。母校、私の愛する国士館の発展を再度祈念申し上げ、挨拶いたします。

—— どうもありがとうございました。

野木 最後になりましたが、最後の最後まで、これを渡すべきか、どうかしようか迷っておりますが、ヘーシング先生は、皆さんもご承知のとおり、国際柔道連盟から十段の称号をいただいております。日本の柔道を世界に広めていただいたヘーシング先生に、マスコミの方たちから何らのお祝いの会があるのかと期待しておりますが、いまだに聞いたことがありません。そこで、これを機会に、この会を通じて先生に十段の赤帯を差し上げればと。きょうお集まりの皆さんの心をヘーシング先生に託したいという気持ちで、真っ赤な帯を差し上げたいと思います。

閉会の辞・小森 本日は、このように多数の皆様のご臨席を承り、まことにありがとうございました。先ほど司会者の方から中締めということでしたが、これをもちまして国士館大学武徳徳育研究所設立二十周年記念祝賀パーティーを閉会させていただきます。